ランビル国立公園および周辺二次林の鳥類相と、イバンの村人による鳥の民俗学的な認識

相原　由美（愛媛大学農学研究科　森林再生修復研究室　修士１年）

生息地の分断が鳥類に与える影響について、現在までに広く研究が行われているが、東南アジアでは少ない。ボルネオ北部サラワク州に位置するランビル国立公園は、巨木が多く見られる原生林だが、国立公園の周辺は二次的な植生になっている。今回の調査では、公園内と公園から約６ｋｍ離れた所に位置する二次林の鳥類相を記録し、比較を行った。

調査を行った二次林はイバンの村人により使用されていて、主に焼畑の短期休閑林、中期休閑林、焼畑後 20 年以上経つ林、ゴム園、孤立林と、5 種類の異なる植生に分けられる。それぞれの植生にプロット（100m×10m）が設定してあり、調査ではプロット内に出現した鳥類を記録した。国立公園内では 2002 年までに 237 種の鳥類が記録されている。今回の調査では、二次林内で１３６種の鳥類を記録したが、これはほぼ公園内の記録と一致した。この記録を用いて、出現頻度の違いにより、公園内と二次林とで比較を行った。

また、ボルネオのイバン族は、サイチョウ（*Buceros rhinoceros*）の動きを模した踊りや、装飾品として羽を用いることで有名である。７種の鳥を用いて吉兆を占う「鳥占い」もあり、このように文化の中に鳥を取り入れていることで知られている。二次林調査では、イバンの村に滞在して、村人から鳥の現地名やその鳥にまつわる物語の聞き取り調査も行った。鳥の現地名には、鳴き声など生態的な特徴が反映されていて、鳥にまつわる話も、今まで知られているものとは異なるものが含まれていた。これら結果から、イバンの村人が鳥の認識をどのように行っているのか、また実際の鳥の生態とどれほど関連があるのか、考察を行った。